

エミリー・ディキンソンの詩の変容

—— エマスの超絶主義および南北戦争の影響 ——

田 中 安 行

はじめに：

Emily Dickinson (1830-86) はアメリカ New England の Amherst に生まれ、生涯の大部分をその町で過ごし、32才頃からは社会生活からも隔絶して自分の家に引きこもって生活した。ロマン派の自然詩人とも呼ばれているが、生前に発表した作品はわずか7篇に過ぎなかった。没後発見された詩稿が発表されて、その特異な詩は反響を呼び、1955年に Thomas H. Johnson によって編集された全詩集によってその全容が明らかになった。

New England は建国当初からのピューリタニズムの伝統と Ralph Waldo Emerson (1803-82) や Henry David Thoreau (1817-62) などの Concord 派のアメリカ・ルネッサンスとも言われるロマン主義の思想家の影響が色濃い地でもある。

ディキンソンが本格的に詩作を始めた頃アメリカ社会は様々な激動に直面する。中でも南北戦争は文字通り国を真二つに分けて争われた大事件であった。

本論の目的は、エマスの超絶主義と南北戦争がディキンソンの詩にどのような影響を与えたかを考察し、その意義を明らかにすることである。詩人の環境とその時代的背景の中で、特徴的な作品を通して考えていくことにする。

I. ディキンソンの自然観

エミリー・ディキンソンは1830年12月10日に Massachusetts 州アマストに生まれた。In her youth she was vivacious and fun loving.¹⁾ 初代ピューリタンの精神が息づいているこの地では、Calvinist キリスト教が日々の生活と思想の中心となっていた。

It was at the core of daily life and thought. Twice-on-Sunday church attendance, and mealtime, morning, and evening prayers were not tokens of unusual devotion; they were as much a part of ordinary existence as business and house-cleaning.²⁾

エミリーはニューイングランドの社会の厳しい生活習慣と厳格な父 Edward の下で若い女性として育てられていく。1847年に家から8マイルのところにある Mount Holyoke Female Seminary に入学する。しかし学院長 Mary Lyon の “to make the seminary a nursery to the church”³⁾ にしようという教育方針と全生徒に洗礼を受けさせようというやり方に懐疑を抱き始める。1年後の1848年父の勧めもあってこの女子学院を去る。

1849年に父の下で法律を学んでいた彼女の家庭教師の Benjamin F. Newton からエマスの詩集 (1847年刊) をもらう⁴⁾。その後彼女はエマスの著書を次々に愛読するように

なる。

‘Dickinson’s first, bardic world is the world of the early Emerson, the Emerson who would teach men that they could see God face to face and not die—and who would add, echoing Blake, that every man is his own Christ.’⁵⁾

ここでディキンソンの「自然」観が素直に表されている詩を見てみたい。

“Nature” is what we see—
The Hill—the Afternoon—
Squirrel—Eclipse—the Bumble bee—
Nay—Nature is Heaven—
Nature is what we hear—
The Bobolink—the Sea—
Thunder—the Cricket—
Nay—Nature is Harmony—
Nature is what we know—
Yet have no art to say—
So impotent Our Wisdom is
To her Simplicity. (#668)⁶⁾

(私達が目に見え、耳に聞こえるありのままのものが自然である。そしてその自然は天国であり、調和である。その自然の見事な素朴さに対し、我々人間は余りにも無力である)と歌ったこの詩は1863年頃書かれたものであり、エマスの自然観をよく反映している。

Ⅱ. エマスの自然観の影響

エマスはユニテリアンの牧師の父のもとに生まれているが8才で父を亡くす。幼時から読書を好み、早くからプラトンなども愛読していた。ハーバード大学を出てさらに神学校で学び、1829年にユニテリアン協会の牧師となる。2年後に妻を亡くしたことで、その協会の形式主義に満足できなくなったので辞職してイタリア、英国を旅する。そこでエマスはロマン派の詩人の William Wordsworth (1770～1850), Samuel T. Coleridge (1772-1834) 等に会い、知的な会話に刺激を受ける。中でも Thomas Carlyle (1795-1881) との出会いの意味は大きく彼等は生涯文通を交わす仲となる。カーライルはエマスが到達しようとしていた教理を悟っていた。それは ‘the whole material universe is an emblem of a deeper reality’ というものでカーライルはそれを “the garment of the spirit” と呼んだ⁷⁾。

エマスは1833年にニューイングランドに戻り、コンコードに2エーカーの土地と家を買って再婚し、コンコードとボストン地方の知的生活の中心として活躍し始めた。1836年に第1著書 *Nature* を出版した。これは彼の transcendentalism (超絶主義) を最も良く伝えるものであった。それは ‘the recognition in man of the capacity of knowing truth intuitively, or of attaining knowledge transcending [going beyond] the reach of the senses’ と

定義されている⁸⁾。

つまり、人間はその最高の瞬間に、物事の表面の下にある内的な意味を見通す能力を持っている、というもので精神の integration (統合) によって直観的に真理を発見できる、と考えている。カーライルはこの能力は一部の人々しか持たない、と主張したのに対し、エマソンはどんな賤しい人間にも備わっていると主張した。

エマソンは又「いままではヨーロッパの上品な詩人の言葉ばかり聞いてきたが、これからは自分達の足で歩き手を使って働き、自分たちの心を語ろう」⁹⁾と呼びかけた。

これに応えるかのように、1850年代初めはアメリカ思想の黄金時代、アメリカン・ルネッサンスと呼ばれるように多くの優れた作品がこのニューイングランドの地から生み出された。そのいくつかを列挙してみる。

1850	R. W. Emerson	Representative Men
	N. Hawthorne	The Scarlet Letters
1851	H. Melville	Moby Dick
	N. Hawthorne	The House of the Seven Gables
1852	H. B. Stowe	Uncle Tom's Cabin
	N. Hawthorne	The Blithedale Romance
	H. Melville	Pierre
1854	H. D. Thoreau	Walden, or Life in the Woods
1855	W. Whitman	Leaves of Grass

次にエマソンの *Nature* の一部を見てみる。

'In the wood, we return to reason and faith.
There I feel that nothing can befall me in life,
—no disgrace, no calamity (leaving me my eyes),
which nature cannot repair.
Standing on the bare ground, —my head bathed by
the blithe air and uplifted into infinite space,
—all mean egotism vanishes.

I become a transparent eyeball ;
I am nothing ;
I see all ;
the currents of the Universal Being circulate through me
I am part or parcel of God.¹⁰⁾

「森の中にいると理性と信念を取り戻し、どんな災難にも会わないような確信が生まれる。大地に立って、頭を楽しげな風にさらし、無限の空間を見つめていると、あらゆる卑しいわがままな心は消えていく。そして私は透明な眼球となり、無となり、すべてが見え

るようになる。普遍の存在が私の中を循環し、私は神の一部、その分子となる…。」

このようにエマソンは、最初はユニテリアン派の牧師として、ピューリタニズムのもつ人間の原罪、予定説等を否定し、また、三位一体説を否定して聖書を合理的に解釈してユニテリアニズムを継承していった。しかし、次第にユニテリアニズムのもつ冷たい機械的、合理的解釈のもたらず道徳的緊張感の欠如を批判するようになった¹¹⁾。

'Over all nature and all men there existed an "over-soul"—a kind of divine mind, an all-pervading spiritual power which existed in and as a part of all things. Each man had a share of it within him, which he could behold by intuition. And because each possessed a share, he was in a sense divine himself, capable of great things. Each should be guided by the soul within him, and abandon habits of mind and the authority of the past. Each man was unique; and each had a duty to interpret that share of truth that was in him to the world.'¹²⁾

人間と自然の内部およびそれを超越して、the Universal Being—Over-soul が存在すると考え、人間は直感によってそれを見つけ、それを世界に知らせる義務があると考えた。

'The most important and the most exciting aspect of man is his individuality—his ability to mold his own character and to develop the capacity for self-reliance. This individuality can be fully realized only when man is in communion with Nature, of which he is a part. Man's soul is part of the soul of Nature, Oversoul.'¹³⁾

人間の最も重要で素晴らしい点は、それぞれが個性を持っていることで、自分自身の人格を形成し、自信を築き上げて行く能力を持っていることである。この個性は人間が自然と交わる時に完全に実現される、人間は自然の一部なのだから。人間の魂は自然の魂（Oversoul 大霊）の一部である。上記注(10)の *Nature* からの引用部分にはその考えがよく示されているのがわかる。

では、こうしたエマソンの思想の影響が濃く出ているディキンソンの詩を見てみよう。

Nature—the Gentlest Mother is,
Impatient of no Child—
The feeblest—or the waywardest—
Her Admonition mild—

In Forest—and the Hill—
By Traveller—be heard—
Restraining Rampant Squirrel—
Or too impetuous Bird—

How fair Her Conversation—
A Summer Afternoon—
Her Household—Her Assembly—
And when the Sun go down—

Her Voice among the Aisles
 Incite the timid prayer
 Of the minutest Cricket
 The most unworthy Flower—

When all the Children sleep—
 She turns as long away
 As will suffice to light Her lamps—
 Then bending from the Sky—

With infinite Affection—
 And infiniter Cars—
 Her Golden finger on Her lip—
 Wills Silence—Everywhere— (#790)

「自然は最も優しい母，どんな子供にも苛立たず，弱い者やわがままな子もおだやかに
 さとす。森の中や丘の上で，旅人は耳を傾ける，す速く駆け回るリスやせっかちな小鳥も。
 自然と語り合うのは何と楽しいこと，夏の午後に自然とともにいて，自然と集いそして太
 陽が沈むと— 通路から聞こえる自然の声は小さなコオロギのおどおどした祈りを誘い，
 とるに足らぬ花もうごかす。すべての子ども達が眠る時，自然は灯に火をとますために向
 きをかえて，そして空から身をかがめて— 限りない愛情と限りない心づかいで，その唇
 にあてた金色の指が静寂をうながす，いたるところに— 」

Ⅲ. 超絶主義の超克と表現形式の模索

ディキンソンはピューリタニズムの伝統を受け継ぎつつも，マウント・オリヨーク女子
 学院の苦い体験以後，それに別れを告げてエマスの超絶主義の影響の下に詩を書き始め
 た。しかし，同時にその社会の合理主義，科学的思想も学んでいた。‘She is heuristic
 poet, a poet of investigation, of knowledge as value. Her poetry experiences and argues and
 questions.’¹⁴⁾ 彼女は探求し，議論し，問いを発する詩人であった。

Weisbuch は先に注(5)で引用したように「ディキンソンの最初の，吟遊詩人としての世
 界は，エマスの世界である」と言った次に，‘Dickinson's second, confessional world is
 the skeptical (and especially skeptical-through-longing) world’だと述べている¹⁵⁾。つまり
 彼女のピューリタンとしての徹底した懐疑主義が形而上学的な深い懐疑にまで広がって
 いったことを示唆している。

Had I not seen the Sun
 I could have borne the shade
 But Light a newer Wilderness
 My Wilderness has made— (#1233)

「もしも太陽を見なかったならわたしは日陰に耐えられたでしょうに— しかし光を見たばかりに私の荒野は新たな荒野になりました」¹⁶⁾

この詩はIで取り上げた自然の中に没入し、そこに火や神を見出したような詩とは違っている。太陽は神であり、愛であり、至福を象徴する。しかし、それを知ったが故に自分の中の暗黒、野生的なものにも気付いてしまった。ここには現代人の醒めた眼さえも感じさせるものがある。探し求めてやっと最善のものを手にした瞬間、現実の自分の弱点や欠点を知る懷疑する人間の眼である。

Longing is like the Seed
That wrestles in the Ground,
Believing if it intercede
It shall at length be found.

The Hour, and the Clime—
Each Circumstance unknown,
What Constancy must be achieved
Before it sees the Sun ! (#1255)

「憧れることは土の中で格闘している種子のようなもの、救われるだろうか、ついには地上に現れることができるかと思いながら。時と気候が移り変わり— どんな変化も気付かれず、こんなにも忠実な仕事が行われるのだ。種子が陽の目を見るまでには！」

絶えず、未知のもの、光と美、最善のものを求めて苦悩する人間の心が、土の中の種子の成長になぞらえて歌われている。

My River runs to thee—
Blue Sea ! Wilt welcome me ?
My River waits reply—
Oh Sea—look graciously—
I'll fetch thee Brooks
From spotted nooks—
Say—Sea—Take—Me ! (#162)

「私の川はあなたに走っていきます。青い海よ。私を歓迎してくれますか？私の川は返事を待っています。おお海よ、慈悲深く見て下さい。私は汚れたすみずみから小川を持って参ります。ああ海よ、私を受け入れてください！」¹⁷⁾

「青い海」とはここで何を表すのか。前掲の1233番における“the Sun”や1255番の“the Sun”に相当するものではなかろうか。そして「私の川」は青い海に至る長い道のりであり、土の中で地上に出る日を願ってものがく“the Seed”であろう。自己実現、自己完成を目指す者の葛藤と不安と懷疑の日々を示していると考えられる。

From Blank to Blank—
 A Threadless Way
 I pushed Mechanic feet—
 To stop—or perish—or advance—
 Alike indifferent—

If end I gained
 It ends beyond
 Indefinite disclosed—
 I shut my eyes—and groped as well
 T'was lighter—to be Blind— (#761)

「空(§) から空へと道なき道を— 機械的にただ歩き、止まり、倒れ、また歩いた。ひたすら無頓着に— たとえ目標に達しても、それが終わるのは遥かかなた— 無際限に広がるばかり— 私は目をとじた。やはり同様手探りだった。盲になる方がよほど楽だった。」¹⁸⁾

この詩も前の詩と同様に無限の暗黒の世界を何かを求めて、ただ前へ前へと歩み続ける者の焦燥と孤独な悲劇が表されている。ここで 'end' (目標) とは、神を知り、the Sun を見ることもかもしれないが、それが終るのは無限に広がるかなたのことであり、いつ辿りつくかできない。眼を開けていても、眼を閉じていても同じ手探りである。むしろ目が見えなくなる方が楽かもしれぬ— と、いく分自暴自棄の感情さえ漂わせながら、それでも歩くことを止めない。

Each Life Converges to some Centre—
 Expressed—or still—
 Exists in every Human Nature
 A Goal—

Embodied scarcely to itself—it may be—
 Too fair
 For Credibility's presumption
 Too mar—

Adored with caution—as a Brittle Heaven—
 To reach
 Were Hopeless, as the Rainbow's Raiment
 To touch—

Yet persevered toward—sure—for the Distance—
 How high—

Unto the Saints' slow diligence—
The Sky—

Ungained—it may be—by a Life's low Venture—
But then—
Eternity enable the endeavoring
Again. (＃680)

「命はみなある中心に集中する。現れようと現れまいと— 人間の本性はすべて一つの行先き（ゴール）がある。おそらくそこには行きつけまい— どんなに真偽をかんぐっても、それはあまりに美しく、決してそこなわれることはあるまい。意を注いで崇めてもはかない空のようで、そこに倒れることは望みうす、虹の衣のようで触れることさえできなくて— 久遠に向かいさらに強く追い求め、精進しても聖者たちのゆったりした勤勉さに至るには、その空はなんと高いことか。人の一生のお粗末な冒険ではおそらく体得できまい— しかしその時でさえ〈永遠〉がふたたび努力を喚起しよう— 」¹⁹⁾

ディキンソンは自分の‘core’に向かって永遠に辿りつかぬかもわからない旅を続ける。彼女が1652番の詩で‘Advance is Life's condition’と言っているように、前に進むことが彼女にとっては詩人としての与えられた運命であった。

この詩では、‘Exists in every Human Nature/A Goal’ ‘Embodied scarcely to itself—it may be—’ ‘Ungained—it may be—’と主語と述語が入れ替えられていて、意図が最後までかくされている。辿りつく目標が分かっているように見えながら、その不安定な文構造の中にそれが崩壊することを予感させている。詩人はその充満する混沌と、連続性の喪失に立ち向かわなければならない²⁰⁾。

ディキンソンは自分の中に深く根差したピューリタニズムを引きずりながら、伝統的な精神構造が現実の中では不安定であることを認識し、自分の世界を求め続けた。エマスの影響によって彼女は超絶主義に傾いたが、さらにそれを超克して自分の表現方法を求めようとする努力が、これらの詩に反映していると考えられる。

IV. ディキンソンと南北戦争

ディキンソンは1858年頃から本格的に詩を書き始めたが、1861年頃から少しずつ社会生活から身を引き始め、1862年のいくつかの事件を境に、ごく身近な人を除いては世間との交渉を一切絶ってしまった。

しかし次の表に見るように彼女の詩作は、1862～65年に最も集中し、847篇と全生涯の作品の半分近く of 作品を書いている。中でも1862年は1日1篇以上も書いたことになる²¹⁾。

1858年	51篇	1862年	366篇
1859年	93年	1863年	140年

1860 ♫	63 ♫	1864 ♫	172 ♫
1861 ♫	85 ♫	1865 ♫	84 ♫

ディキンソンはエマスの超絶主義の影響を受けたが、そのグループの持っていた社会問題に対する意識が皆無に近いと言われている²²⁾。ディキンソンの生きた時代は、産業革命が進行し、1837年にはアメリカ最初の大恐慌が起こりアメリカ産業界は大きな打撃を受けた。Margaret Fuller (1810~50) が提唱した女性解放の運動は1848年 Seneca Falls での「女性独立宣言」へと発展する。ユニテリアニズムによる「原罪」観の除去は人間解放の立場での文学作品を生み、ホーソンの「緋文学」やストウ夫人の「アンクル・トムの小屋」が広く愛読された。そして奴隷解放運動の高まりと連動して明かになってきた産業構造と社会構造の矛盾は、南北戦争というアメリカ歴史上最大の内戦をひき起こした。

ディキンソンははたしてこれらの社会問題とは無縁に、彼女の家と心の内部に引きこもって詩作を続けていたのであろうか。

父の Edward は弁護士であり、政治家として、国会議員や州議会議員として活躍し、アマーストに鉄道を引き、アマースト大学の理事長として、その地方の指導者の一人であった。ディキンソンと親しく、彼女に影響を与えた Samuel Bowls は Springfield Republican 紙の編集長であり、Dr. Josiah Holland は同紙のコラムニストであり、Scribner's Magazine の編集長でもあった。さらに Thomas Wentworth Higginson は1862年4月以来ディキンソンの文学上の文通相手であったが、彼は奴隷解放運動と女性の権利運動の指導的な運動家であった。彼は彼女と文通を始めた頃、北軍大佐で最初の黒人部隊の指揮官でもあった。彼女は戦争中ずうっとヒギンソン大佐の消息を Republican 紙でつかんでいたし、ディキンソン家では他にも数種の新聞を購読していたので、南北戦争のみならず、社会の動きは、一般の家庭よりももっと正確に把握していた²³⁾。

'The war framed her attitudes and efforts, as it did those of other writers. It became for her, as it did for them an arena for the clash of beliefs and doubt, with concerns long held given through war a greater urgency.'²⁴⁾

南北戦争は彼女の手紙や詩に反映されていくのである。ヒギンソンは1862年11月から South Carolina で上記黒人部隊を指揮し、63年7月に負傷して64年5月に退役している。63年2月にディキンソンが彼に宛てた手紙の一部を示す。

'...I should have liked to see you, before you became improbable. War feels to me an oblique place—Should there be other Summers, would you perhaps come? I found you were gone, by accidents, as I find Systems are, or Seasons of the year,...Could you, with honor, avoid Death, I entreat you—Sir—It would bereave

Your Gnome²⁵⁾

ここにはヒギンソンが戦場へ行ってしまったことを知った驚きと嘆きと、無事に戻って来られるだろうかという死の暗い予感を拭き切れない苛立ちが示されている。

実際、南北戦争は現在に至るアメリカ史の中で、次の戦死者数の表が示すように最大の残酷な肉弾戦であった²⁶⁾。

Civil War	618,000
World War I	405,000
World War II	227,000
Vietnam War	56,000
Korean War	54,000
Mexican War	13,000
Revolutionary War	4,000

アメリカの独立戦争の死者の150倍以上がこの内戦によって死んでいっている。それは後述するようにディキンソンの身の回りにも起こり、当時のアメリカ人の誰もが、多くの死と虐殺と挫折を見る結果となった。

人間の理性と科学的精神の勝利を信じるには、世界はあまりにも苛烈であり、同国人同士が、同胞が互いに憎み戦う姿を目のあたりにして、彼女は大きな衝撃を受ける。そしてこれらの社会的事件から詩的創作欲に刺激を受けていくのである。前述の5年間に集中した多作の期間は、エマスの影響から始まった自己探求の道が、多くの悲劇を直視することによってさらに深く彼女に死や永遠の問題を考えさせることになり、初期の詩よりもっと透徹した彼女独自の世界を形成する秀作を生み出すことになった。

Johnson 全集の索引分類から調べてみると彼女の詩の中で Death をテーマとするものが最も多いことが分かる²⁷⁾。

Dead, Death	148	Heaven	37
Love, the Loved	115	Nature	34
Life	71	Heart	33
Friends	64	God	30
Soul	55	Human beings	26

次の詩を見てみよう。これは1862年に書かれたものである。

They dropped like Flakes—
 They dropped like Stars—
 Like Petals from a Rose—
 When suddenly across the June
 A wind with fingers—goes—

They perished in the Seamless Grass—
 No eye could find the place—
 But God can summon every face
 On his Repealless—List. (#409)

「雪片のように散り、星のように落ちた— バラの花びらのように— 突然、6月の風が指をひろげて吹く時。彼らは一面の草原に消え、その場所は誰にもわからない。だが神はすべての顔をその不滅の名簿にお召しなさる。」

ここにいう6月とは、1862年6月26日から7月2日にリッチモンドを中心に展開された Seven Day's Battle を指すものと考えられる。この時、北軍は半島作戦に敗れて退却し、多くの犠牲者を出したのである²⁸⁾。

戦闘を雪と風に例えることによって、兵士の死を当然のことと見せるのではなく、むしろ自然を、突如として表情を変える恐ろしいものに見せている。

木の葉が散り、時が移っていく日常の世界はディキンソンにとっては、とても不連続なものであった。そして別離と死を当り前のようにして耐えていくことは、彼女にとって理解できないことであった。

'With the war, Dickinson was faced with a compelling threat of unaccountable interruption, losses, and massacres. Had the world not seemed to her a disrupted place before, it certainly would appear so after 1861.'²⁹⁾

次の詩はアマースト大学学長の息子の Frazar Stearns の1862年の戦死に寄せて翌年に書かれたものと見られている。

Victory comes late—
And is held low to freezing lips—
Too rapt with frost
To take it—
How sweet it would have tasted—
Just a drop—
Was God so economical?
His Table's spread too high for Us—
Unless We dine on tiptoe—
Crumbs—fit such little mouths—
Cherries—suit Robins—
The Eagle's Golden Breakfast strangles—Them—
God keep His Oath to Sparrows—
Who of Little Love—know how to starve— (#690)

「勝利は遅れてやってくる、そして凍りかけた唇にそっと入れられる。今や霜に気をとられ、それを受ける術もなし— 一滴でも味わえたならどんなに甘美だったことだろう。神はそんなにケチだったのか、神のテーブルは高すぎて爪先きだたねばありつけない。小さな口にはパンくずがお似合い、コマドリにはサクランボが適当— 鷺の黄金の朝食だと小鳥たちは窒息気味— 神さま、雀たちへのお誓い、お守り下さい。ご慈悲が薄れるとどんなに飢えるかご賢察を— 」³⁰⁾

1861年12月にフレイザーが Anapolis へ出発した時、ディキンソンは従姉妹達への手紙に、'I hope that ruddy face won't be brought home frozen' と不吉な予感を書き送っている。

た³¹⁾。しかし、それが現実のものとなり、遠い出来事のような戦争は身近かなものとなった。

この詩は、勝利が遅れて、冷たい唇に今は味わうすべもない無念さを歌うところから始まっているが、彼女はその詩作の論理に従って自分の感情を婉曲に独特のアイロニーにくるんで表現していく。

ディキンソンはエマスンから「自然は天国であり、自然は調和である」と見る超絶主義を学んだ。そして内に流れるピューリタニズムの精神と闘いながら、常に大いなる存在、自然、the Sun, God を自己実現しようとして前に進み続ける詩人となった。

彼女は南北戦争によって大きな精神の衝撃を味わうが、それによって触発された詩人としての創作意欲によって、死や永遠を見つめる詩人へと変わっていく。日常のありふれたものの中に深い意味を発見し、表現する方法を身につけ、激しい感情を直接的な生の言葉で表現するのではなく、神と自分の内部を探求する詩人としての方法によって、内包するものにひそむより豊かな言葉を用い、彼女だけが創り出しえた詩的文法による技法に従って、生涯に1,775 篇におよぶ作品を書き続けたのである。

以 上

Notes :

- 1) James E. Miller, Jr. et al : *United States in Literature* (Glenview, Ill., Scott, Foresman and Company, 1979) p.335
- 2) David Higgins : *Portrait of Emily Dickinson—The Poet and Her Prose* (New Brunswick, N. J., Rutgers University Press, 1967) p.46
- 3) Higgins : p.45
- 4) Helen McNeil : *Emily Dickinson* (London, Virago Press Ltd., 1986) p. x iii
- 5) Robert Weisbuch: *Emily Dickinson's Poetry* (Chicago and London, The University of Chicago Press, 1981) p.9
- 6) Edited by Thomas H. Johnson : *The Complete Poems of Emily Dickinson* (Boston, Little, Brown and Company, 1957) p.332 (以下ディキンソンの原詩の引用は本書からのものを用いる。掲載ページ数は省略して、詩番号のみを#で示す。詩の訳は注のない場合は田中による)
- 7) Walter Blair et al : *The United States in Literature* (Glenview, Ill., Scott, Foresman and Company, 1968) p.247
- 8) Ibid.: p.248
- 9) Miller, Jr. et al : p.220
- 10) Ibid.: p.225
- 11) 萱嶋八郎「エミリー・ディキンソンの世界」(東京, 南江堂, 1985) p.25
- 12) Richard H. Brown : *The Hero and the People* (New York, The Macmillan Company, 1964) p.72
- 13) Richard O. Curry et al : *The Shaping of America* (New York, Holt Rinehart and Winston, Inc., 1972) p.172
- 14) Mc Neil : p.9
- 15) Weisbuch : p.9
- 16) 岡隆夫訳「エミリー・ディキンソン詩集」(東京, 桐原書店, 1984) p.36
- 17) 萱嶋八郎 : p.71
- 18) 岡隆夫 : p.60
- 19) Ibid.: p.207-208
- 20) Shira Wolosky : *Emily Dickinson : A Voice of War* (New Haven and London Yale University Press, 1984) p.22-23

- 21) Johnson : p.viii
- 22) 萱嶋八郎 : p.29
- 23) Wolosky : p.34-36
- 24) Ibid.: p.33
- 25) Thomas H. Johnson, Edited by : *Emily Dickinson, Selected Letters* (Cambridge, Mass., London, England, The Belknap Press of Harvard University Press, 1986) p.182
- 26) Larry Cuban et al: *Promise of America ; Breaking and Building* (Glenview, Ill., Scott, Foresman and Company, 1975) p.57
- 27) Johnson : pp.724
- 28) Curry et al : p.245
- 29) Wolosky : p.37
- 30) 岡隆夫 : p.130-131
- 31) Higgins : p.125

たなか やすゆき (英語教育学・英米文学)